

Endymion 第四巻に見るキーツの夢と現実—— 「静謐の洞穴」の意義

金 澤 良 子

序

John Keats の長編物語詩 *Endymion* は、主人公エンディミオンが夢で邂逅した乙女に、その正体が月の女神シンシアであるとは知らずに恋をし、彼女を追い求め旅を進める冒険譚である。ところが、創作を開始してから半年余りが過ぎ、ようやく最終巻にまで辿り着いたキーツは、エンディミオンの旅の最終目的であるシンシアとの愛の成就を描くのではなく、人間の乙女であるインド娘をエンディミオンの前に登場させている。美しいインド娘の出現に、エンディミオンの心は二人の乙女の間で揺れ動いてしまう。

Goddess! I love thee not the less: from thee
By Juno's smile I turn not — no, no, no —
While the great waters are at ebb and flow. —
I have a triple soul! (*Endymion*, IV, 92-95)

ところで、Amy Lowell や C. L. Finney, Newell. F. Ford といった批評家は、キーツがエンディミオン創作以前から Drayton の *Endimion and Phoebe* に親しんでいたと考え、インド娘の登場も先輩詩人の影響を多分に受けている可能性があることを指摘している。ここで『エンディミオンとボイペ』におけるシンシアについて触れておこう。ドレイトンの描くシンシアは自らをニンフの姿に変え、エンディミオンに近づくが、エンディミオンはニンフの魅力には屈せず、シンシアへの変わらぬ愛を誓うのである。そこでニンフは魔法の力でエンディミオンを虜にし、彼はニンフに愛を誓ってしまう。その瞬間、ニンフは、自分の正体がシンシアであることを明かし、二人は無事、永久に結ばれることとなる。つまり、この場合、シンシアにとってはニンフの姿はあくまでエンディミオンの自分への愛が本物であることを確認するために地上に降りてくるときに必要な仮の姿でしかないといえるだろう。

フォードは、キーツが『エンディミオン』でシンシアに纏わせたインド娘の姿は、ドレイトンがシンシアに纏わせたニンフという姿と同様に、シンシアが自らの女神という正体を隠すだけの変装、「オリンピアの神々が地上の恋人に会いにゆくために変身するというお決まりの策略」(Ford 70) と捉えている。フォードの指摘するように、ジョーブ神を始めオリンピアの神々は地上の恋人に会いに行く

ため、自らの姿を変えることがしばしばある。もともとエンディミオンの夢の中に現れたシンシアは夢の中では存在できて地上ではエンディミオンの前に存在することは出来ない。したがって何か別な姿として地上に降りるしかないのだが、それなら女神でさえなければ、ドレイトンが描いたようにニンフでも何でもかまわないはずだろう。

しかし、キーツはシンシアにニンフではなく、エンディミオンを十分に惹き付け、かつ夢の乙女とは異なる美しさを持ったインドの乙女という人間の姿を与えている。インド娘は「喘ぐ脇腹」(Endymion, IV, 440)を持ち、エンディミオンが口づけできる唇を持ち、天上で彼の手をまどろみながらもしっかりと握り締めていた。エンディミオンは実際に触れ、口づけできる肉体を持つインド娘を無視することができない。一方、夢から飛び出してきたシンシアはエンディミオンのほうに身をかがめるが、その様は「三日月姿」"crescented" (IV, 438)であり、エンディミオンの心の高鳴りが向かう先は「美しい影」"that fair shadowed" (IV, 446)であり、消え行くシンシアはもはや「影」"the shadow" (IV, 456)そのものであった。実際に夢の乙女が現実世界に現れたとはいえ、シンシアの実体のなさは、血の通う人間の乙女であるインド娘の存在によって一層際立ってしまう。シンシアは、覚醒しているエンディミオンにとってもやはりつかみどころのないまぼろしであり、インド娘こそが実体をとともう現実の人間なのだ。またシンシアは金色に輝く髪を持つまばゆいばかりの女神として、それに対し、インド娘は漆黒の巻き毛の乙女として描かれていた。このように夢の乙女シンシアと対置させることで、インド娘は、現実世界の象徴となっている。インド娘は単なるシンシアの変装ではなく、キーツの夢と現実に関する議論の重要なファクターなのである。

二人の女性を夢と現実というそれぞれの世界を体現する女性のように対照的に描いていることは読者に二人の女性が同一であることを最初の時点では知らせないようにするための手法であるだろう。と同時に、対照的に描かれる二人の女性の間で葛藤するエンディミオンの存在が、夢と現実の間で葛藤する人間の姿をも象徴しているかのようである。しかし、キーツの意図はもっと深いところにあるのではないだろうか。本論では、エンディミオンとシンシアの愛の成就を先延ばしにしてまで描く必要のあった第四巻のインド娘と登場と消失にこめられたキーツの意図を探りながら、夢の乙女をあきらめたエンディミオンが最後に訪れた「静謐の洞穴」とは、エンディミオンにとって、さらにはキーツにとっていかなる意味を持ったものであるのかを導き出していきたい。

1. インド娘の消えたわけ

天上で自分の目の前に現れたシンシアをさしおき、エンディミオンはあろうことかインド娘に口づけをしてしまうのだが、それを見たシンシアは悲しみの中、姿を消す。その直後、キーツはエンディミオンが自分の恋人として選んだインド娘をも消してしまう。このことは一体何を意味するのだろうか。多くの批評家は、本来ならシンシアが現われ夢が現実となった時点でインド娘は消え、インド娘の正体が実はシンシアであったという結末で物語は終わるはずだったが、この時点では詩の分量が3500行にしか達しておらず、キーツの当初の目標である4000行に達していないためもう500行を書

くために結末を遅らせたにすぎないという意見で一致している。Walter H. Evert も、もはやエンディミオンが漆黒の駿馬にまたがり天上に到達したことこそがクライマックスで、それ以降は“melodramatic filler”「主に詩行を満たすだけのメロドラマ」(Evert 161)と考えている。またフォードは、「あと 500 行を書くことに一心になり、奇術師のトリックにたよった」(Ford 77)とし、あえて「シンシアの嫉妬をかうため、そして本来なら待っていたはずの最後の合一を打ち砕くため、エンディミオンをインド娘に口づけさせた」(Ford 77)と考える。しかし、女神を前にしながら、エンディミオンがインド娘にした口づけは単に今後の話を複雑にし、結末を遅らせるための策略とは言い切れないのだ。シンシアの美しさを前にして心高鳴らせ、口のきけぬエンディミオンが、インド娘の愛らしさには「こらえきれずに」(IV, 455) 口づけしてしまう。こうした行動はエンディミオンがシンシアではなくインド娘を自ら選択した何よりの証のように描かれている。

だが、キーツはどうしてインド娘を選んだエンディミオンにさらなる不幸、シンシアばかりかインド娘までもが消えるという悲劇をもたらしたのだろうか。キーツが 4000 行の詩の完成を計画していたのは確かだが、エヴァートの言うように、4000 行まであと残りの 500 行が必要だとはいえ、インド娘が消えたこと以降を、メロドラマの一言で片付けては、いささか問題が生じるだろう。ここでインド娘が消えた理由を考察してみたい。まずは、天上にやってきてまで自分をないがしろにし、インド娘に口づけしたエンディミオンの裏切りに対するシンシアの復讐と考えることが出来る。確かに、心無いエンディミオンの姿を見て泣いて消えていったシンシアが、恋敵インド娘に対し復讐に燃え、エンディミオンのもとからインド娘を奪い去ったという可能性もあるだろう。しかし、ここではシンシアはもはやインド娘のような人間の女性ではなく、人間の世界とはかけ離れた神々しい月の姿として描かれているのだ。

Full facing their swift flight, from ebon streak,
The moon put forth a little diamond peak,
No bigger than an unobserved star,
Or tiny point of fairy scymetar;
Bright signal that she only stoop'd to tie
Her silver sandals, ere deliciously
She bow'd into the heavens her timid head. (IV, 496-502)

さらには、「あの方の優しい心には復讐などという言葉はない」(IV, 470-71) とエンディミオンが言うように、恨み言を言うこともなく美しい乙女としての姿を消したシンシアの心の優しさは完全である。したがってここではインド娘が消えた原因を、シンシアの嫉妬による復讐とするのではなく、エンディミオンの方にこそ求めるのが適当だろう。

ところが、主人公が第二巻、第三巻を経て他者愛を獲得し、インド娘を愛するにいたったと考える

批評家の多くは、このインド娘の消失に重きをおいていない。エヴァートは、エンディミオンが地上の人間であるインド娘を愛していることを宣言した後、神々の使者であるヘルメスにより二人が天上に行くことを許されたという状況から、エンディミオンがこれまでの旅を通じ「地上のそして人間の美の栄光を完全に理解したため、彼は神々にふさわしい相手になった」(Evert 160)と考えている。インド娘を選んだエンディミオンが天上に到達したことに注目し、現実の美を了解することで天上に行く権利、ひいてはシンシアと結ばれる褒美を与えられたというエヴァートの意見は納得がいくように思われる。しかし、実際にインド娘は彼の前から消え、エンディミオンは茫然自失となり、場面は「静謐の洞穴」という精神の内奥を象徴する世界に移っていく。すでに神々に相応しいと認められた者だとすれば、なぜこのよう場所に導かれねばならないのだろうか。

インド娘が消えゆく様子は、その直前にエンディミオンのもとからシンシアが影となって消えうせた情景を想起させるだけでなく、第二巻の「ジャスミンのあずまや」でシンシアが眠れるエンディミオンを残して消え去ってしまった姿とも重なる。「至福への境界には悲嘆しかないのでしょうか」(IV, 460-61)と自ら、苦悩する心の内を明かすように、エンディミオンが至福を得ようと思うとその至福は決まって彼の指の間からすると落ちていってしまうのだ。まず、第二巻で描かれたように、エンディミオンは「ジャスミンのあずまや」でシンシアと出会うが、目覚めてみると彼一人残されていた。そして第四巻では、夢が現実となり、シンシアが彼の眼前に現われたというのに、エンディミオンは愚かにもインド娘に口づけしてしまったがゆえ、これを見たシンシアは悲しみのあまり姿を消してしまうのだった。シンシアの消散は前者と後者でその質が明らかに違うと言ってよいだろう。前者の場合、すなわち第二巻までは、エンディミオンはシンシアだけをひたすら追い求めていたとはいえ、その至福はあくまで夢の中でのことであり、当然夢に覚醒はつきものであるため、エンディミオンが覚醒後に夢の乙女を失い寂寥感を味わうことを余儀なくされるのは当然だろう。矛盾のようにも感じるが、「ジャスミンのあずまや」では覚醒後に訪れる寂寥感から逃れるために夢を見ようとするのである。エンディミオンは夢がもたらす寂寥感に懲りることなく、再び夢をシンシアだけを追い続けていた。こうしたエンディミオンのシンシアへの愛に対し、フォードはエンディミオンの愛は誠実そのものでその誠実さこそがグローカスを救ったと考えるが、本当にそうなのだろうか。

実際、エンディミオンはインド娘がシンシアであるとは夢にも思わず彼女の美しさに心を奪われてしまい、二人の間で葛藤した末に、インド娘の方に口づけをしてしまった。Douglas Bush やエヴァートは、エンディミオンのインド娘への愛は一連の旅の過程で獲得した他者愛に満ちたものと考えが、一概にそうとは言い切れない。川岸で悲しみに暮れるインド娘に対してエンディミオンが最初に口にした言葉とはどんなものだったのだろうか。エンディミオンは「美しいひとよ、私を哀れんでくれ」(IV, 105)と何よりもまず自らの悲しみを訴え、「苦悩する私の脳髄は狂いだしているので、わたしに付き添ってってくれ」(IV, 116-17)とその悲しみの癒しをインド娘に求めるばかりか「それでもあなたが望みならあなたと一緒にいて光と夕暮れ、闇、夜があけるまで嘆いていなければ罪になる」(IV, 134-36)とむしろ悲しんでいたインド娘の方から慰めの言葉をかけられるほどである。この言葉

は「ジャスミンのあずまや」でシンシアがわが身の寂しさで苦しむエンディミオンを「ほどなく神々しい天の光輝にまでもあなたを高めてあげましょう。そうしてひと夏じゅう川辺にある林間の空き地にふたりで籠っていきましょうね」(II, 809-11)と慰めた姿と重なるだろう。さらに、折り返し歌を聞いた後でも、インド娘へのエンディミオンの利己的な発言は変わらない。「わたしを眠らせぬ煩いとその赤目を閉ざさせ、絶望を見ぬようにしてくれたなら」(IV, 307-308)「わたしの狂気を宥めておくれ!」(IV, 312-13)表面上、いかにインド娘に愛を誓おうと彼女の悲しみより、自分の悲しみで不安になるエンディミオンの言葉は、「ジャスミンのあずまや」でシンシアにかけた言葉となんら変わらない。

「私の存在はあなたから精を吸っているのだから、いつもその腕にこの身を委ねてはいけなだろうか。」(II, 739-41) 夢の乙女に向けたこうした言葉は一見、相手を非常に愛しているゆえの言葉のようだが、見方を変えれば、自分が孤独になることへの恐怖におののくきわめて自愛的かつ未熟な精神ゆえのものだ。さらに「わたしの許からまたこっそり姿を消すのでしょうか、そう、確かにそうだ。あなたは行ってしまい、私の狂わんばかりの寂しさなど気にも留めないことでしょう」(II, 745-48) こうしたエンディミオンの発言から、あくまでもこの恋の主体は自分であり、シンシアがいないと自分が生きていけないことや、自分の寂しさを訴えるばかりで相手の境遇を思いやることのない、極めて利己的な彼の愛情が窺えるのである。こうしたエンディミオンだからこそ、いくら追求めていた夢の乙女が目の前に現れたといっても、無意識のうちに、自分に寂寥感をもたらしうるシンシアではなく、自分を宥めてくれるインド娘に口づけしたのだろう。相手がシンシアであれ、インド娘であれ、エンディミオンはまだ自分の心の内側に閉じこもっているのである。インド娘がシンシアにすぐ変容せず姿を消したのは、キーツがもう少し詩の行数を稼ぐためというよりは、天上の世界にやってきてはいてもまだシンシアにふさわしいものと認められていなかったためなのだ。キーツはインド娘を奪うことで利己的な精神を持つエンディミオンに、このままではシンシアと結ばれる栄光は手に入らないと警告を発していたと推測できる。

2. エンディミオンの精神的成長

当初、利己的だったエンディミオンのインド娘に対する愛情だが、シンシアが消えた後に目を覚ましたインド娘に対する彼の言葉は今までとはいささか様子が異なっている。

Ah, shouldst thou die from my heart-treachery! —

Yet did she merely weep — her gentle soul

Hath no revenge in it: as it is whole

In tenderness, would I were whole in love!

Can I prize thee, fair maid, all price above,

Even when I feel as true as innocence? (IV, 469-74)

この言葉には自分の苦悩や寂しさよりは、むしろインド娘を思いやる気持ちにあふれているのが見て取れるだろう。今まで自愛的で未熟だったエンディミオンが、なぜこのような思いやりを持つにいたったのだろうか。夢で見た乙女を現実で手に入れることがエンディミオンの旅の目的のすべてであった。ところが、夢から現実へ飛び出してきたシンシアを不本意とはいえ受け入れなかったエンディミオンは今や完全に夢の乙女を失ったのだ。夢ではない現実の世界でシンシアを失ったエンディミオンの悲しみはたいそう深いものだろう。これまでアレシューザとアルフェウス、そしてグローカスにインド娘と出会い彼らの悲しみに同情するが、それは常に他者の悲しみでしかなかった。しかし、シンシアを完全に失ったことはまぎれもないエンディミオン自身の悲しみである。インド娘の歌う 'Ode to Sorrow' を聞いても完全には理解できなかった他者の愛の悲しみの深さを、エンディミオンは自分自身で経験して初めて了解できたのだ。キーツ自身、1818年の五月、ある書簡の中でこう述べている。「哲学上の公理というものは、私たちの脈拍で証明されない限り公理ではないのです」(LI, 279) キーツにとって、公理や思想といったものは、いかに理論上認識できても、実際に自分の脈拍で体験しない限り、つまりおのれ感覚によって証明されない限り、それらは公理や思想とは言えないものなのだ。

愛する人が自分と同じような悲しみで苦悩することに心を痛め、自分より相手を思いやることができるようになったエンディミオンは、利己的な状態から他者愛に完全に目覚めたといえるだろう。

What is this soul then? Whence

Came it? It does not seem my own, and I

Have no self-passion or identity. (*Endymion*, IV, 475-77)

エンディミオンは戸惑いながらも、自分を愛する気持ちも主体性もないことを告白しているが、彼は夢の乙女の消散という悲しみを自ら経験することで、精神の内側にこもりがちな自愛的な状態から、知らず知らずのうちに、インド娘の感情という外的世界に自己の意識を向けられるようになったのだ。キーツは第一巻から人と人との魂の融合の重要性を示し、第二巻では実際、アドニスの眠る銀梅花のあずまやを、第三巻ではグローカスが溺れたキルケの愛欲のあずまやというようにそれぞれ自己の精神の内側に閉じこもり、外の世界に目を向けることのない隔絶された世界を描くことで、幾度となくエンディミオンに利己的な愛の危険性を警告していた。キーツは William Hazlitt の *Essay on the Principles of Human Action* (1805) を読むことによって、自分自身がすでに持っていたこうした考えに一層確信を持つようになったのだろう。ハズリットは、この著作の中で、人は想像力により、自分自身の精神の内側から脱し、他者の感情や自身の未来の姿に意識を入り込ませる資質を本来備えているとしている。これまでエンディミオンは、自分のこれからの人生を想像することや、夢の乙女が自分をまた置き去りにして去ってしまうのではないかと不安になることはあっても、自分の意識を他者の気持ちや利益に完全に没入することはなかった。グローカスやスキュラとの出会いは他者の感

情に目を向けさせようとするキーツの試みではあっても、岸辺で嘆くインド娘の前ですら、自分自身の悲しみをもらしてしまうエンディミオンの愛情にはまだ利己的な側面が多分にあることに変わりはない。

だが、エンディミオンはいまやシンシアを裏切ったことで彼にもたらされる死の恐怖よりも、インド娘に向けられるかもしれない死の復讐の方を案じているのである。彼の意識は自分自身の精神の内側から脱し、インド娘の感情の中に投じられていることが見て取れる。エンディミオンは、他者の感情に溶け込むことで、他者と一体化することができたのだ。プッシュヤエヴァートが主張するように、エンディミオンが利己的な状態から他者愛を獲得することだけがこの詩の目的なら、自ら利己心が消えたことを認め、インド娘と愛し合うことを選んだエンディミオンから彼女を奪う必要はないだろう。しかし、キーツは実際にエンディミオンからシンシアとインド娘の両方を奪い、絶望の淵に追い込み、彼を「静謐の洞穴」へと誘うのだ。この洞穴とは一体どんな場所で、エンディミオンをそこに導いた意図とは何なのだろうか。

3. 静謐の洞穴がはらむ意味

There lies a den,

Beyond the seeming confines of the space

Made for the soul to wander in and trace

Its own existence, of remotest glooms. (IV, 512-15)

まず、「静謐の洞穴」の特徴として以下の六点が挙げられる。第一に、この洞穴は人の魂が彷徨いこみ、自身の存在のありようをたどる場所だ。第二に洞穴の周りは闇で覆われ、常に悲哀に満ち、あらゆる悪の巣窟が広がっている。第三に洞穴の内側にいる限り外側の苦悩につきまといわれることはない。第四にこの洞穴に人は競って来ず、卒然と来るのだ。第五にここでは苦悩していたものの苦しみから開放され、希望は人を悩ませ、夢を見ない眠りにつくものがもっとも幸福とされる。第六にこうした洞穴を人はみな自己の魂の奥底に持っているという。今までエンディミオンが、自らの想像力が紡ぐ甘美な夢の中に逃げ込むことで、現実の苦しみから解放されていたのは確かである。だが、インド娘を選び、夢を「陰気な幻影」(IV, 466)として退けたエンディミオンは、いまや、インド娘をも失いこれ以上ない悲しみに襲われている。これまでなら、夢を見てその苦悩を和らげることが可能だったが、夢を排した以上、夢の至福に頼ることは出来ない。エンディミオンは現実で起きた苦難を夢の中ではなく、現実の中で乗り越える必要があるのだ。夢ではない苦悩を癒す場所、それがこの「静謐の洞穴」といえるだろう。

ここで「静謐の洞穴」を夢、中でも「ジャスミンのあずまや」と比較しながら考察してみたい。まず、二つの共通点としてあるのが、どちらも閉ざされた空間であること、そして苦悩を忘れられることだ。相違点としては、「ジャスミンのあずまや」は、金色の苔が一面を覆い、瑞々しい花々と緑で溢れる

明るい場所であるのに対し、「静謐の洞穴」は特徴の第二点目で挙げたように、闇と苦悩で周りが覆われている。この見た目に明らかな違いは、両者が持つ本質的な意味を対照的に表現している。まず、「ジャスミンのあずまや」では、エンディミオンは「心楽しき夢路を辿り彼女の魅惑にほうけてみよう。来たれ、眠りよ。来たれ、この上なく穏やかな眠りよ」（II, 703-04）と自らの意思で夢を求めていることが分かる。一方、「静謐の洞穴」は第四点目にもあるように苦悩の境地に至れば望まずとも手に入り、また第五点目の「夢路なき眠りにつく瞳こそもっとも輝ける」（IV, 541-42）とあるように、洞穴は夢を見なくとも、ただそこに眠るだけで苦悩から解放され、「蒼ざめたものも、当然のように健やかな色の花と咲き、陰鬱な沈黙はもっとも能弁と」（IV, 538-40）なるのだ。こうした dreamless の洞穴は、夢を見ないのだから夢から覚め、現実に戻ってきたときの寂寥感を味わうこともないばかりか、夢で現実でない至福を味わったがゆえに、覚醒後現実がつまらないもののように感じるということもないのだ。その意味で“Happy gloom”（IV, 537）であり、“Dark Paradise”（IV, 538）と表現されるのだろう。夢の至福を味わったものにとり、現実世界の輝きは失われてしまうだろうが、この洞穴では夢を見ないため覚醒後も夢と現実の差に苦しむことがないのだ。

また第五点目の「希望は人を悩ませ」（IV, 540）とあるように、希望を持ち、未来に期待するからこそ、現実でその希望がかなわなかったときに落胆するのであって、夢と同じくこの洞穴では希望など人を落胆させる余計なものに過ぎないということだろう。こうした dreamless かつ hopeless のある種自己完結した洞穴が魂の奥底にあること（第六点目）に気づけば、シンシアを捨て、夢を捨てたエンディミオンでも、現実のどんな苦難にも屈せず、しっかりとこの世で生きていけるのだ。覚醒後の寂寥感もなければ、希望がかなわなかったときの挫折感も味わわずにすむのである。この「静謐の洞穴」はシンシアが象徴する夢の世界と間逆の世界といえる。つまり、シンシアとインド娘がそれぞれ夢と現実の象徴として対比するかのごとく描かれたように、この「静謐の洞穴」もまた甘美な夢が繰り広げられた「ジャスミンのあずまや」と対置している。シンシアという夢を捨て、インド娘を選んだエンディミオンが行くのに相応しい場所なのだ。

悲しみあふれる現実世界をいかにして受け入れるかということが重要なテーマであったキーツにとって夢の力を借りずに苦難の多い現実で生きるための避難の場として描かれたこの「静謐の洞穴」が重要な意味を持っているのは確かだ。キーツは第四巻の前半で悲しみを受け入れようと歌うインド娘を描いていた。したがって John Middleton Murry がエンディミオンは「魂の苦悶を乗り越え最終的な心の平安を得た人間の中の英雄」（Murry 177）であると述べるように、キーツは現実の苦難から逃れる場として夢以外の新たな場所を見出したのである。一度入れば新たな苦しみがない「静謐の洞窟」は、夢も見ないばかりか、希望も持つこともないのだが、こうした洞穴を胸に抱えて生きることがキーツの望む現実で生きるということなのだろう。

エンディミオンには夢で見た乙女を現実で手に入れるという目的があったからこそ、ここまで長いこと旅を続けることが出来たといっても過言ではない。夢や希望があるからこそ、人間はその夢や希望を現実のものにしようと努力することができるのだ。キーツはアダムの夢をエンディミオンで描こ

うとしたが、アダムは夢で見たイブを現実でも手に入れたが、人間は夢で見たものをそのまま手に入れられるとは限らないだろう。だからといって夢を見ることなく、希望も持たず、今置かれている現状だけに満足する生き方もどうだろうか。「静謐の洞穴」が象徴する生とはその性質は正反対ではあるものの、夢の世界と同じく、自己の精神世界のみに生きる閉鎖された、精神的成長のみられない生であるのだ。つまり、人間が生きていくうえで、夢と現実の両者を分断し、どちらか一方の生を選ぶことは不可能なのである。キーツは、これまで自分の夢だけに囚われ、乙女を追いつけるエンディミオンを描き、第四巻ではインド娘を登場させ、エンディミオンに夢だけを追いつけることができないことを痛感させていた。また、インド娘だけに愛を捧げようとするエンディミオンからは、そのインド娘を奪い去っていた。最終巻で起こった複雑怪奇とされ、時に冗漫さを指摘されるインド娘と「静謐の洞穴」にまつわる出来事は、夢と現実のどちらか一方を求める極端な姿勢のエンディミオンに対するキーツの一種の警告だったといえるだろう。

最初はいくまで別個に存在する二人として極めて対照的に描かれていたシンシアとインド娘だが、途中で二人を同一の存在であるかもしれないとあえて気づかせる書き方をしたことにこそキーツの真の考えがひそんでいたのだ。インド娘が消える場面は実際、次のように描かれている。

While to his lady meek the Carian turn'd,
To mark if her dark eyes had yet discern'd
This beauty in its birth — Despair! despair!
He saw her body fading gaunt and spare
In the cold moonshine. (IV, 504-508)

インド娘が月の輝く姿を見ないまま消えていったことは、シンシアが、空で月として、つまり地上のいかなる人間の目にも映る姿で存在しているときは、インド娘という人間の姿として同時に存在することは出来ないということだろう。インド娘とシンシアの二人が、以前のような別個の存在ではなく、同一の存在である可能性を示唆することで、そもそも夢と現実という二つの分類は不可能だということを表そうとしていたのだ。エヴァートは、「静謐の洞穴」の描写に関して、「もうあと四百行詩を続けるためにふさわしい口実」(Evert 161)と考えたが、キーツは、夢の世界と対置した「静謐の洞穴」を登場させることで、夢を見ることなく、希望を持たず現実世界だけで生きていくことが良いことなのか、可能なのかというのを問いかけ、現実だけの世界では生きていけないこと、同時に夢の世界だけでも生きていけないことばかりか、夢は私たちの精神的成長にとっていかに重要であるかを示すことができたのだろう。

結

これ以降、キーツの『エンディミオン』に対する興味は薄れていき、本来の旅の目的である夢の乙

女シンシアとエンディミオンの恋の成就是最後の場面からも明らかなように簡単になされてしまう。エンディミオンとシンシアの恋を描くことへの関心よりもむしろ自らの新しい考えを詩の形にすることにこそキーツの主眼が置かれているようになっていたのだろう。マリーが、「キーツのエンディミオンにおける自己の探求は静謐の洞穴において終結している」（Murry 176）と指摘するように、「静謐の洞穴」を描くことで、エンディミオンの葛藤だけでなく自分自身の夢と現実世界との葛藤に決着をつけたキーツは、夢を苦難の多い現実からの心地よい一時的な避難の場として現実と切り離して捉えていた考えから、夢を人間に希望を与え、現実生活をより理想に近づくよう高める原動力であり、現実の一部たるものとして了解する考えになったのである。

Notes

キーツの詩の引用は、Jack Stillinger, ed., *The Poems of John Keats*. (Cambridge, Mass.: The Belknap Press of Harvard UP, 1978) に拠る。

書簡の引用は、Hyder E Rollins, ed., *The Letters of John Keats: 1814-21*. 2vols. (Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1958) に拠る（vol.1 は *LI* と略す）。

Works Cited

Evert, H. Walter. *Aesthetic and Myth in the Poetry of Keats*. Princeton: Princeton University Press, 1965.

Ford, F. Newell. *The Prefigurative Imagination of John Keats: A Study of The Beauty-Truth Identification and Its Implications*. London: Stanford University Press, 1951.

Murry, Middleton John. *Keats*. Oxford: The Arden Press, 1955.